

その作品群は無事ですが…

- The old masters are not lost, but... -

1 美術館の傲慢と寛容

芸術の秋、という。

空は高くなり、蟬でなく虫の声が足下から聞こえる。日が暮れるのも早く制服も冬服になって、部活動の活動時間も終了時間が繰り上げられるようになる。二学期は学校行事が多い、朝夕の気温差がはつきりしはじめた頃、並盛中では文化祭に講演会だの芸術鑑賞会なんてのが行われる。学年によってさまざまだが、ツナ達の学年は美術館に行くことになっていた。

「…のに何故この時期…」

ぬるっとした風が通り抜けていった。

謎のオブジェが視界の左右に立っている。公立の施設らしい広い造りのエントランスに建物もひと中学校の一学年分の人数を入れてもまだじゅうぶん余裕のある横長の建物だった。夏が訪れようとしている日差しがカッと窓やアスファルトに照りつけ、一昨日まで降っていた雨のせいでぬるく湿った空気に肌がべたつきを残していた。

「暑いっつーか、蒸れるっつーか…」

秋にも予定されている芸術鑑賞会に更に今年は施設のお祝いだか記念だかのオプショで学校招待があった。並盛中も日を分けて全学年が見学することになっており、…こんなことになっている。

「…ってさ、ここ秋にも来るんだよね」出来ればそっちの方が良い。

と、ツナは息を吐く。暑いし、眠い。朝からごたごたしてて、それでいてランボにとどまらずピアンキやフウ太まで来たいと言いついて現地集合は大変だったのだ。

「他の見学者に迷惑をかけないように。迷うことはないだろうが先生もそれぞれの場所で展示を見ているから分からないことがあったら聞くこと」

では、と先生が合図のように手を挙げると整然とホールに並んでいた生徒達は散る。笹川京子ちゃんは目が会ったツナににこりと笑うと黒川花とで正面のドアに消えていった。ガラス張りだからってわけではないけれど彼女が入っていった先はきらきらして輝いているように見えた。

「かったりー…」

両手を頭の後ろに組み、獄寺はぼやいている。美術館と同じ敷地内にある私設の小さな博物館、この二つの展示を見てプリントを提出、楽といえど楽だし、室内なのでまあ涼しそうでもある。

「まあまあ」

「絵なんて分かんねーけどさ、授業が潰れるのはラッキーだよな」どっち行く？

山本は機嫌良くパンフレットを広げるとツナ達を見た。遠巻きに鑑賞される獄寺はともかくも『やまもとくん一緒にまわらない？』とこういった自由行動が許された場所での女子からの誘いの言葉がかから

ない山本はたまに不思議だと思ふ。

「つか、オメー昨日誘われてたんだからそいつと一緒に回れよ」

と、獄寺はどこにでも行けと言わんばかりに冷たい。

「誘われてなんてねーぜ？」

「そうなの？」

昼休みに廊下を歩いていたところを呼び止められ、ツナと獄寺は山本を残して教室に入った。隣のクラスだったか、その二人組はどうしたって山本のファンだ、何しろ見る目が違っていた。羨ましいなあと大変そうだなあとが入り交じった感想を抱いたのを覚えている。獄寺は一貫して無関心だったが。

「なんか変なこときいちゃまったみたいなんだよな」

今日のことについて逆に彼女たちに訊いてみたら変な顔をされたと山本はこめかみを掻く。

「へー…」

いったい何を訊いたのだろう。

入るとさっそく涼しい風と世界的に有名な名画を見ている人々ごと描かれた絵が出迎えた。正面に広く取ったインフォメーションカウンターがあつて、その門番宜しく先生が一人腕を組んで立っている。入口で騒いだり、屯ったりしたら風紀委員長以前に先生に注意されるのだろう。階段の横にはコインロッカー、奥は売店、手前の病院の待合室のような場所には飲み物の自販機と長椅子が並んで上から吊られたテレビモニターは今月の展示とか説明にはあるものの、ニュースを流していた。

「…また、同公園敷地内のゴミ箱が不審火で焼けるなど不審な点があり、警察が捜査を進めるとともに市の管理局でも情報を呼びかけてい

ます」

キャストから画像が切り替わって被害があったらしい建物が映し出される。知らない街の知らない美術館の正面玄関は、整えられていてきれいで、悲劇的な様子もなければ憂いている感じもなく、当たり前前に表情がない。文化施設つてのはどうしてこう見ればそうと分かるような入り口だったりするのだろう。あ、でも見てらしいとか分からなきや誰にも気付かれずきつと困る。だよなあ、とツナは小さく呟いた。

「何が？」

と、山本がけろりと訊き、あつちでチケット見せるんだつてよと続けた。見りゃわかる、とすかさず獄寺が返す。だよなあ。

「獄寺くん、絵つて詳しいんだっけ？」

そういえば、と思う。配られたチケットを取り出しながら思い出しついでに聞いてみる。

「地上絵とか壁画なら得意つす」

「絵は下手なのになー」

「るせえ」黙れ。

入場の列が出来ている、入るのはみんな同じ制服だ。

「…警戒を強めています。なお、この区域では三日前にも同様の引つたくり事件があり、その手口から同一犯であるとみて…」

「博物館の方、地球の歴史と宇宙の展示つてあるぜ、獄寺」

「……」

ツナは見るともなくまたテレビ画面を見、その斜め下の壁に貼つてあるポスターを獄寺に示してみせる。確かにそこには地球と隕石と人工衛星が描かれてある。獄寺は未確認生物の類いやブラックホールな

んかも好きだったはずだ。

「そっちから先にしようか、獄寺くん」

言うとおつまらなさそうな表情が一転、きらりと瞳が輝いた。

「い、いいつすか？」

決まりなー、と山本はくると方向転換をする。生徒の殆どは美術館の方に入っているらしく、ときおり歓声までが聞こえてきた。歓声が起こるほどのそのすごい物のための招待、というのがきつと正しいのだろう。観なければいけないのが美術館の一階と二階、そして博物館。

「博物館ってどこだ？」

配置図もあるプリントを三人で慌てて見直す。ランニングコースみたいな道路に沿って池と芝の広場の向こうに行かなければならない、とはいえここから見えない場所でもない。

「道沿いに行っても結局入口まで建物を回ることになりますね」確かに。

「一回出た方が早くね？」

「そうだね」

あつさり出ちゃえ、ということになった。歩くと案外に敷地は広く、見学時間は限られている。

『晴天の霹靂マシーン』

「何だそれ？」

「電気振動を伝える装置だそうです」

山本は無視し、ツナだけを見て青天の霹靂とは晴れ渡った空に突起こる雷をさす意味の言葉です、と獄寺は言い、アホ牛の癩癩です、と続けた。そうした昔の電気実験の装置にさえ目をキラキラさせてい

る、彼にとつては博物館はおもちゃ箱みたいなものだろう。

「そういや今朝、クロームがうちに来てさ」ランボで思い出した。

「朝から？」

「どうしても渡さなきゃいけないものだからって三人がかりで持ってきて置いてったんだよね」こんなの、とツナは両手を広げる、新聞紙一面ほどを両手で描き、どうしていいか分かんなくて、と息を吐く。

「絵とかですか？」

「見てないけど…そんな感じだったな、預けて欲しいって骸が言ったんだって」

「へえ」

「リボンが調べておくって言ってたけど…」

「宝の地図とかだったりな」と山本が笑うのを

「ますますわかんねーよ」

獄寺が冷めた声で突っ返す。

どうして骸がツナに絵だの地図だのを寄越すのだ、とそれはツナも同感だ。まだ中も見えていないものを今から気にしてもしょうがないが、相手が相手だけにちよつと怖い。

「…あれ、ヒバリ？」

山本が歩調を緩めた。いつもの学ランを翻し、いつもの風紀委員長がオブジェの前をすたすたと歩いていて、このひとと芸術って似合わないとか、噛み合わないとかツナは悪く思いつながらもちらと考える。それはきつと彼はイメーシとして壊す方で作る方ではないからだろう。

う。

「来てたのかよ」つかこんなとこ居て来る意味あんのかよ。

呆れたように言いながらも獄寺の視線は真っ直ぐに向こうにある博

物館だ。

雲雀は誰かと話していたのか携帯電話を手にしている。風紀委員の雲雀は風紀委員長だからして参加しているのか、こちらの視線に気付いても見返すこともなく何も言わず踵を返すと歩いて行ってしまう。黄色い鳥がそれを追うように飛んでいた。

「……」涼しい顔してるなあ。暑くないのかな。

「ま。とりあえずこっち終わらせちまおーぜ」

——かしやり。

空みたいにからりとした声で山本がプリントを振る。足が乾いた葉を踏み碎き、小気味いい音がした。ちよつと驚く、暑さも盛りに入るという時期に落ちる葉もあるんだとツナは足下に視線を落とした。

「……ん？」

「おい、ちよつとそれ見せろ」

獄寺が言う。ツナも顔を上げてそれを覗き込んだ、なんか埋まつてるなどちらりと見えたとき感じたのだが、改めて見ると溜息が出そうなくらいに。

「よく見るとすごいなこれ……」

「クイズみたいですよね」

三人がまったく読んでいなかった配布プリントには鑑賞会についての感想の欄だけでなく見ないと分からない設問までがある。端々に待機している先生といい、いくら自由とはいえ遊ばせないための工夫がそこにはちらほらとあった。本当にクイズじみている。進んで解いてと、まるで自分たちはゲームのキャラクターのようだ。

「ここ？」

プレートには読めない外国語と見たことのある企業のロゴが入って

いた。

美術館と同じ敷地とはいえ、博物館には立派な門があった。まるでそこだけを囲っているような緑と柵があり、隣は駐車場で、警備の人はもちろん、ここにも先生が待機しているのがすごい。獄寺はそれを一瞥し、小さく舌打ちしていた。

門を入るとすぐに案内板と守衛室なるものがあり、ぎくりと足が止まる。中にはディーノの背後にでもいそうながつちりしたひとが構えており、見咎められることもなかったが、かといって気易い気分でも入れない。ともかく、何故かそこから動いてはいけないような気がした。

「……？」

なんだこの感じ。変だ。

戸惑いを迷っていると思われたか、右の木立に遮られながら見える建物が博物館だと教えられた。図の通りだ。通路と花壇に仕切られて手前に、向こうに低い建物があるが、看板は読めなかった、雰囲気からしてそこには入ってはいけないらしい。

「こんにちは」

「特別展示やつてるんですよ？」

一般の見物らしい三人連れが楽しげに過ぎてゆく。しかも慣れた風で、なんだか立ち止まった自分が恥ずかしいくらいだった。

「十代目」どうかされましたか。

「う、ううん」

足を動かす。ああ普通だ、良かった。

「……」この博物館は元はなんとか家の別荘だったものを何年に移築、もともと邸宅美術館として一部を開放していたが、現在ではコレクション

ンのうち、絵画を美術館に移し、東洋の装飾品や陶器、並盛の出土品などを展示している』だそうです、十代目「プリントには空欄があつて、昔の道具がなんとかかんとか。そこを埋める答えを探し出す必要がある。」

三人でパンフレットや解説パネルを読んだ。古い写真とカメラの元祖があるとか。

「セイテンノヘキレキマシーンに日本初の光学レンズと電子顕微鏡……」

「なんでもアリだなー」

「完全に元の主つてひとの趣味だよ」

古くて、きちんと展示されているのだからけどなんだかおもちゃ箱みたいにツナには思える。レンズ、望遠鏡、地球儀のような形のもは『渾天儀』というらしい。

「娘がいらないだ」

黒いコートを着た男が別の警備員と話している。聞いたことのあるような声は低く落ち着きのあるもので、誰だったかと考えていると、促されて男は博物館とは反対の方に消えていった。

「あつちで黒点が覗けるそうです。時間が合えば人工のオーロラも見られるそうですよ」

「へえ……」

「嬉しそうだなー、獄寺」

と、山本が笑ったところで時刻を報せるチャイムが鳴り渡る。いたとかなんとか獄寺をこっそり探しては追ってきたらしい女子たちの声がする。続いて背後から聞こえたのは美術館でも聞いた女性アナウンサーのニュースを読み上げる声だった。

「……では次のニュースです。オークションに出品された絵画の贋作疑惑が浮上しました。問題となる絵は、競売会社のノースティーズが先月二二日にロンドンで開催したオークションで個人所蔵だったものをオランダの美術館と個人収集家が競り合った末に……」

獄寺単人と別れて、沢田綱吉は家までの道を真つ直ぐに歩く。

すると家が見えてきたところで、がはは笑い且不穏な歌声を聞いた。

例の、あの、上機嫌な、あれだった……そうな。

その声の主は、周囲のさまに唾然呆然とする沢田に気付くとせつせと動かしていた手を止め、「あ。ツナだ」と言い、そして悪びれもなくじゃーね、とガハハと笑いながら飛んで逃げようとした。

「待てイ」

それを捕まえて年長たるべく咎める口調で沢田は言つてやったのだと主張した。

「なにやつてんだよ、なにやつちやつてんだよ、ランボ」他人んちの塀だろこは。

「知らないもんね、ランボさんあつたからやつたんだもん」

「しかもクレヨンめちやくちやにして……ペンまで……」

落ちていたのか、どうしたのか、こどもはそこにあつたクレヨンで壁と道路に前衛的で理解不能なグラフィートを制作、展開していたという。

「……ボス」

「離せえ、ツナのバカ」

「離すか！」

叱る沢田に逃れることもとでやんのやんのとやったらしい、背後の人物には気付かなかったそうだ。

「ボス」

「え」

声に振り向くと彼らの後方には霧の守護者とかいう黒曜中の少女が立っていた。

「クローム」

「こ、これ、今朝渡しそこねたの。あの、イーピンちゃんたちにボスから渡しておいて…」

「文化祭？」

ランボの身体を押しえつけながら差し出されたものを受け取る、小さな名刺大の紙片には無料とあり、黒曜中文化祭実行委員の捺印、学年とアイス、クリームソーダ、そんなのが並んでいた。

「あつ！ こら、ランボ！」

緩んだところをこどもがすり抜け、沢田への悪口を忘れることもなく逃げていく。ああもう、と彼らしく沢田は追うのを諦めた。

「クロームのどこ文化祭、早いだね。模擬店なんだ？」

「……ぶしようきつさ……」

「ブシヨウ？」

クロームはこくりと頷くと戦国武将の喫茶だという。武将とアイスかあ、と思ったとはいふものの、沢田のクラスだつてそう変わらないなにか茶屋とかなんだかをやるに決まっている。並中の文化祭は二学期で、近くなれば朝や放課後の時間をあてて準備するようになって、いろいろと忙しくなる。

じゃあ、と彼女が去り、そこへ登場したのが並盛の風紀委員長——つまりは自分であると。

雲雀は学校にいたところを、委員からの報告を受けてやってきた。それも、ほんの少し前まで応接室には警察官が来ており、校長とで説明を聞いていたのだ。

「警察」

「え？」

「きみのところは何ともないの？」

「あ。えつと……」

「このところ神社仏閣の宝物が盗まれたり傷付けられたりしてる。並盛神社も額を壊されたんだよ」

目がびつくりだと訴え、身体が硬直したようになってる。

「落書きがあるつて来てみたら…、これ君がやったの？」

「違います！」

と、こればかりは力強く、さらに手にしていた紙をぶちまける。沢田はあわあわと拾い集めると紙片をぎこちない手つきでポケットに仕舞いながら、オレじゃなくて、ランボです、と言った。つまりはきみじゃないか、管理も出来ないのか。

「どうも持ち主が落としたか忘れたかしたのを見付けたみたいで……」

鞆を肩にしゃがみなおすと破れたスケッチブックと折れたクレヨンを集めながら焦るように言う。普通に言えば雲雀にだって他人の仕業と分かるのにそんな風を上擦ったような声になったりするから武器が出てしまうというものだ。

「叱ったんですが、あいつ、逃げて……」まったく。

「……」

足下に転がっているクレヨンを見ながら溜息を吐く。幼児用の色が少ないもので、よく見れば近くにある箱も新しい。おろしたてという風に見えた。

「洗えば？」

「あー…はい…」でも懐かしいですよ、クレヨン。

白、赤、紫、青。あ、やっぱり肌色あるんだな、と沢田は小さく笑う、誤魔化しているのか。

「とはいえ、油だからきみには無理だね。最小限のペナルティで許してあげるから」

「えっと、それは…」

のろりと返そうとしてはっと見る。気付くのが遅い。

「…」

伸びずに痛がるくらいには成長しているものだと思う。

「いてえ…」

手加減は当たり前にした、たぶん。打たれ強いのが信条であるかどうかは不明だが、痛めつけられることをこつこつと続けければ小動物なりに耐性が出来る。雲雀は武器を携帯電話にかえて壁の清掃を命じ、そして赤ん坊は、と問うた。

「今日は見かけないようだけど」

「…調べ物しに、出かけました」

ふうん、と雲雀は言うのを涙目で見、沢田はどこか不思議そうな顔をした。

「じゃあ…」

風の音に混じって小さく校歌の端切れが耳に届いてきた。野犬の駆除などやり残したことはまだある、学校に戻ろうとして雲雀は踵を返

す。

ヒバリさん、と沢田は言った。「リボンに用があるならうちに来ますか？」

遅れて鳥が飛んでくる、雲雀の肩か頭に来るところを何故か沢田の顔に直撃した。器用な芸だ。

「なんつで…」

鼻を押さえながらしまらない格好ではあるが、そんなのも却って可笑しくて、うんと応えてしまう。

「あの人に聞いたことがある」

「へ？」

「イタリアにも文化財警察があるって」

「……」

「イギリスの警察にそんな課がある。世界中の美術品を探し回っているんだ、日本の国宝に近いものなんかも出回っているから」

沢田を越して沢田の家に向けて足を進める、軽い足音と気配がつかってきた。

「並盛に、そんな世界に渡っちゃうようなすごいものがあつたんですか？」

「きみ」

「…はあ？」

「…つてことはまずないけど。古い物ならいくらかはあるよ、絵とかそれはヒバリさんのお屋敷とかお屋敷とかが所有とかではないのでしようかと沢田はごによごによと口ごもるように言い、そして黙った。

「今日行つたる。絵ならあの美術館にある全部と、博物館に二点。修復中のが一点あるけど、一定の期間しか本物は出さないのが二点ある。」

今回の展示は特別で、だから招待なんだ」通常は複製展示だよ。

「そうなんですか……」

なんかすげえな並盛と、見てきたばかりだということに感心している。

美術館も博物館も特別展示だということを知っていたらいい。

「イギリスから来るのにうってつけの理由にもなる」

沢田ははあ、とそこは追加のように頷く。半分くらい判っていない

ような気もする、というよりも、今日の見学の意味はあったのか。

「詳しいんですね、ヒバリさん」

「……」

聞かされたばかりなのだからすらすら言えて当たり前だ、国の美術館や博物館がどう困ろうが知ったことではないが、悪意ある何者かの手によって、並盛が壊され、乱されるなど風紀委員長としてほっておけない。それに引っかけかかっていることもある。

「別に」

応接室にきた警察官は二人で、ひとりとは外国人だった。向こうの反応を思い出すに雲雀がいったい何の国際犯罪なのか、引いては警察のどこの課だ、本当に警察官なのかという不審の目を強くしていったから、慌てて身元を明かしたようだったが、美術品に関わる捜査を担当してまず、とは言っていた。こちらは確認に赴いたままで、今日ちやうど見学で来たと美術館側から聞いたので――。

社社の額は壊されたが、並盛の美術品は無事らしい。

「ただいまー。リボン帰ってる？」

「うるせえな」おやつタイムを邪魔するのか、ダメツナ。

甘い匂いをまどって赤ん坊はコップジュースとともに沢田の上に登場した。

「――へぶっ！」

「珍しいな、ヒバリ」

「やあ」

赤ん坊なら何か知っているかも知れない。

副委員長からの報告によれば二人は確かに警察官だった。日本人は

警視庁所属、外国人の方はロンドン警視庁美術骨董課――。

ロンドン警視庁美術骨董課、通称は美術特捜班^{アート・スワップ}。美術品専門の国際的な捜査機関で、雲雀も耳にしたことがある。名画、傑作と呼ばれるものが消えたり、現れたりする話はそこいらに転がっている。ほんとうの価値はともかく、世界で日々美術品は盗まれ、闇のルートで現金の代わりにされたり、虚栄心を誇るだけのオブジェクトとなっている。

美術界が憂慮するのはヴァンダリズム（芸術破壊）だけではなく、むしろ現代では盗難の方だといってもいいようで、被害総額は年間約十億ドル、回収率は十パーセント、その発生は被害額ともに国際犯罪のなかでも上位を占めていた。

雲雀の予感が外れていなければ、嫌な方向に事態は転がっている。

どうしてこんなのを。

「嘘は結構です」

と骸は手を振ってみせた。その反応を見て途端に相手は萎縮する。

「別に殺そうなど思っていないません、こちらに害意があつてにしろ君の行動はあまりにも軽率で、しかもお粗末だ」

「……」さらに小さくなる。